

## 日本映像民俗学の会第37回岐阜大会スケジュール

日時：2015年3月27日（金）、28日（土）、29日（日）

会場：岐阜県揖斐郡揖斐川町谷汲サンサンホール

主催：日本映像民俗学の会

後援：揖斐川町教育委員会、中日新聞

### 3月27日（金） エクスカーション（自由参加）

午後13：30 谷汲サンサンホール玄関に集合

13:30ー 揖斐川町エクスカーション

候補地：藤橋歴史民俗資料館、徳山ダム等

19:30ー 大会プレイベント <私のふるさと、チベットの文化と変容>上映会（自由参加）  
（会場：善立寺本堂、揖斐川町谷汲長瀬、30名まで）

『ルロ祭り』45分、2014年、 Cholten Jap

『遊牧民の息子』30分、2015年、Tashchenpai

討論：Cholten Jap、Tashchenpai、北村皆雄

宿泊 旅館・松本屋

### 3月28日（土） 特集上映 <ふるさとの喪失と再生> (非会員は入場料500円)

10：00ー 挨拶・趣旨説明 川瀬 慈（国立民族学博物館）

10:15ー 『水になった村』80分、2007年、監督 大西暢夫

12：00ー13:30 昼休み

13:30ー 『原発被災地になった故郷への旅 —福島県南相馬市—』30分、2014年、  
監督 杉田このみ

14:15ー 『鳥の道を越えて』93分、2014年、監督 今井友樹

16:00ー17:00 総合討論：ふるさとの喪失と再生の記録

登壇予定者：大西暢夫、杉田このみ、今井友樹、志賀泉（交渉中・杉田作品主演の小説家）  
+川瀬慈（国立民族学博物館）、山口 未花子（岐阜大学）

19:00- 松本屋にて懇親会

### 3月29日（日） 会員上映

9:00ー10:00 総会、役員改選



ていた集落に家があることに驚いた。以来、ジジババたちの暮らしに魅せられ、東京から徳山村まで片道 500 キロ、バイクで高速道は使わず山道を走り抜けて何度も何度も通った。そしてその村でジジババたちは大西を「兄ちゃん」と呼び、共にたくさん食べ、いっぱい笑った。村には季節ごとに土地で採れるものを大切に作る、暮らしの知恵や技がある。食卓にはいつも食べきれないほど大盛りのごはんが並び、山はジジババたちの笑い声に満ちている。2006 年秋、いよいよ工事が終わり、水がたまり始めた。もう誰も、村に帰ることはできない。ジジババたちの変わりゆく暮らしに寄り添った 15 年間の記録。

配給元 HP より抜粋 <http://movies.polepoletimes.jp/mizu/>

### 『原発被災地になった故郷への旅 —福島県南相馬市—』

2014 年、30 分、杉田このみ監督

小説家・志賀泉氏と共同制作したドキュメンタリー映画。本作は、2013 年 5 月 25 日と 26 日に、小説家の志賀泉氏（神奈川県在住）と、彼の故郷である福島県南相馬市を旅した記録。南相馬市は 2011 年 3 月 11 日の東日本大震災と福島第一原発事故により、甚大な被害を受け、住民の多くが未だ避難生活を送っている。特に志賀氏の生まれ育った小高区は、原発から 20km 圏内にあり、出入りが自由でも住むことはできない。その現在の状況も紹介しながら、志賀氏の少年時代の思い出の場所を歩く。

作品 HP <http://gentabi2013.wix.com/gentabi>

### 『鳥の道を越えて』

93 分、2014 年、今井友樹監督

映画の舞台は監督・今井友樹の出身地、岐阜県東白川村。あるとき祖父・今井照夫から、かつて故郷の空が渡り鳥の大群で埋め尽くされたという話を聞かされる。孫である監督は“鳥の道”を探し求めて旅にでる。渡り鳥の大群が渡っていた時代、村では「カスミ網猟」が行われていた。渡り鳥を「カスミ網」でどのように捕まえたのか。なぜ渡り鳥を食べなければならなかったのか。そしてなぜ現在は禁猟になっているのか。旅の過程で生まれるひとつひとつの疑問を丹念に追っていく。

作品 HP <http://www.torinomichi.com/>

3 月 29 日会員上映

### 『水が所有される時—タイ・アユタヤの水辺の暮らし』

65 分、2014 年、木口由香監督（NPO メコンウォッチ）

チャオプラヤ河のデルタ地帯に発達したアユタヤは、タイ有数の稲作地帯。かつて、半年も続いた「洪水」は、肥沃な泥や魚をもたらす恵みだったが、50 年前から始まったダムを中心とした近代的水管理、30 年前からの工業団地の造成で様変わりしている。国による新しい大規模な水管理計画も始まる中、アユタヤの人びとは今、どのように「水」を見ているのか—農民、県知事、アクティビストの声を通し、人びとの過去と現在の水辺の暮らしを描く。

### 『海の聲』

20 分、2014 年、仁田美帆監督（映画作家）

海の恵みを糧に生きる相差の人々の姿と相差の海の風景に、長い漂白の末鳥羽にたどり着き、鳥羽の海の情景を綴った詩人伊良子清白の詩「海の聲」を重ねた映像詩。

### 『Sekala Niskala スカラニスカラ』

57 分、2012 年、春日聡監督（駒沢女子大学、多摩美術大学等、講師）

バリ各地の村落祭祀儀礼で行われる多様なトランス・ダンスと、コスモロジーにおける五大元素「地、水、火、風、空」をモチーフにしたサウンド・スケープで織りなす映像・音響民族誌。「Sekala Niskala (スカラ ニスカラ)」とは「可視の存在、不可視の存在」のこと。本作では各地に伝承される「サンギャン」という古い形態から「チャロナラン劇」という比較的新しい形態までトランス・ダンスのヴァリエーションを取り上げ、バリの信仰における神懸かりの意味をホリスティックな響きの中を探る。  
音響マスタリング 久保田麻琴。

### 『蘇る筏』

20分、2015年、制作、京都学園大学・歴史民俗専攻学生数名+手塚恵子（同大教授）  
かつて、保津川には丹波山地で切り出された材木を、都へと運ぶ筏流しが盛んに行なわれていた。しかし、保津川の筏流しは運送手段の発達と共に衰退し、戦後、完全に途絶えてしまった。貴重な伝統技術とともに、筏の記憶も途絶えようとしている。本映像は60年ぶりに復活を遂げた現代の保津川筏流しの記録である。

### 『精霊のうた』(仮)

10分、2015年、矢野原佑史（京都大学アフリカ地域研究資料センター）  
ピグミー系狩猟採集民は、高い音楽性とそれによる心身の療術を司る森の住人として、古くよりアフリカ大陸で知られてきた。彼らの精神世界を象徴する存在である森の精霊たちとの関わりにおいても音楽は不可欠なものであり、それぞれの精霊が個別のうたを持つ。本作品は、子どもたちが、精霊・ジェンギの衣装を縫製して聖域へ届けるまでに唄い上げられるうたとその作業過程を記録したものである。

※作品の長さ、上映スケジュール等、若干変更する可能性があります。

※3月28日、29日の上映スケジュールを中心としたフライヤーを2月に作成いたします。